

大賞

「人生をささえる言葉との出会い」

細野 久美子

柳田先生、二度目のお便りです。私の絵本についての想いを聞いていただきたくてお便りしました。私には子どもの頃の絵本の思い出は、ほとんどありません。私が生れ育った小さな村には本屋さんなど無く、また、本を買える様な余裕も、うちにはありませんでした。小学校に上がってから、運動が苦手で、一人の時間にあれこれと空想する事が好きな私は、小さな図書室に毎日のように通いました。夢の世界に連れて行ってくれる本は、最良の友達でした。その後も本は私の生活の中の一部でした。そんな私が、絵本と出会ったの

は、子どもを授かってからです。子育てが生活の中心だった頃、本好きの私は毎日、二人の子供たちに読み聞かせをしました。今思い出すと、夜寝る前の絵本タイムが、私と子供達の一番幸せな時間だったように思います。そんな子育ても一段落したかな？と思っていた頃、私の人生を支える事になる一冊の絵本と出会いました。それが、いとうひろさんの「だいじょうぶ　だいじょうぶ」です。おじいちゃんに、この言葉を言われ続けて育った男の子が成長し、年を取って弱っているおじいちゃんにこの言葉をかけてあげる……。いとうひろさんのほのぼのとした絵と、優しいお話に、何度読んでも熱いものがこみあげてきました。子供を育てる言葉とはこう言う言葉なのだと思います。当時長女は高校生、長男は小学六年

生になっていました。私は、「もっと早くにこの本に出会いたかったなあ。そうしたら、この子達（特に長男）を「だいじょうぶ？」ではなく、「だいじょうぶ！」と言って育ててやれたかもしれないのに・・・、この本との出会いが遅かった。と、思ってしまったのです。今思えばおろかだったと反省しています。その後しばらくこの本は、本棚で眠っていました・・・。この本に出会ってから十年以上たった今、私はあらためて「だいじょうぶ」という言葉に力をもらっています。というのはこの春、長男が社会人になりました。就職先は、夜勤あり、休日出勤あり、長時間労働あり、という大変な職場です。体を壊さないだろうか、職場の人と上手く付き合えるだろうか等、心配の種は尽きません。小さい頃から、人づきあいが苦手で不

器用な息子には、「だいじょうぶ？」の言葉をかける事ばかりでした。心配のあまり手や口を出してばかりでした。その事が息子との関係を悪くし、息子の自己評価の低さと、不器用さに繋がってしまったと自分を責めていました。そんな私にぽつぽつと悩みを口にする息子を目の前にしてうかんだのが、「だいじょうぶ　だいじょうぶ」の言葉と、この絵本でした。こんな時こそ、私が息子にかけてやれるのは、この言葉しかないと思いました。今一番不安なのはこの子自身だ。私は今こそ、幼い頃に言ってやれなかった「だいじょうぶ！」の言葉を、かけてやろう。かけ続けよう。そして、いつか息子が、この言葉を人にかけてあげられる人間に成長して欲しい。遅くはないんだ、今から、今こそ、と思って毎日息子と接しています。私自

身も持病があり、心が沈みそうになる時があります。そんな時呪文のように「だいじょうぶ、だいじょうぶ」を自分自身に言い聞かせています。「人生を支える言葉を求めている人へ」先生が、帯に書かれた言葉のとおり、今の私と家族を、この言葉が支えてくれています。苦しい事、つらい事がこれからも沢山あると思います。そんなとき、黄色い帯（お世辞抜きに、思い出す絵本の表紙には黄色い帯が掛っています。）のかかった、この絵本「だいじょうぶだいじょうぶ」を思い出して、明るく前向きに生きて行こうと思います。最後まで読んでくださって、ありがとうございました。先生のご活躍を心よりお祈りしております。感謝をこめて。